

# 「都市照明調査・福岡」

2005.01.26-28

早川 亜紀

## ■機能的な道路照明

「渡辺通り」を中心に、繁華街である天神エリアの主な道路を調査しました。路上は道路照明も含めて、非常に整理されています。電柱や電線、サイン看板などが散在することもなく、ポール灯には信号、道路標識、バナー、カメラ、サインなど、必要なものがきちんと組み込まれています。植栽帯に設置された電源ボックスなどと共にダークブラウン色で統一して塗装されているため、公共物がまとめて整理されている印象が引き立っていました。逆に商業エリアの歩道照明は、シルバー色などを使用した個性的なポール灯を用いており、そちらも道路照明と相まって、一層商業の雰囲気を引き立たせています。路上が整理され、統一した照明手法を展開しているために、個性的な店舗ファサードが各々主張をしても、全体的に煩雑にならず落ち着いた印象を受けました。

## ■天神地下街のあたたかい光

まず、地下街へ降りて行く階段に、ハロゲンのダウンライトが使用されていることを不思議に感じました。そして長さ450mに及ぶ地下街が、徹底的に白熱灯のあたたかい光で構成されていることに驚きました。蛍光灯の白い光で明るく照らされている地下街を想像していたからです。この既設の天神地下街には幅約8mの二筋の通りがあり、その両側に店舗がぎっしり立ち並びます。ハロゲンビームのダウンライトによるベース照明、公衆電話の上にはシリカ電

球のダウンライト、サインなどには随所ハロゲンスポットが用意されています。19世紀のヨーロッパの街並みをコンセプトとしているようですが、2月2日から新設の地下街が繋がりをオープンします。新設エリアもあたたかい光で構成されるようなので、他にないこの独特の雰囲気がさらにパワーアップすることでしょう。

## ■屋台のあかり

市内には屋台が至るところにあります。日本一屋台の多い街だそうです。その佇まいはどうか懐かしく郷愁漂うものですが、その運営・管理には独自のシステムがあるようです。毎日きちんと屋台が撤去され、夕方になると屋台を組み立て、公共の電源(お金を払って借りるらしい)から電気をひいて準備をします。屋台の大きさは3m四方程度で、屋根上には共通して内照式のサイン看板があり、小屋内には7~10個くらいの白熱灯や電球型蛍光灯、蛍光灯などが混在して点いています。この狭いスペースで肩を寄せ合い食べるのには、やっぱり裸電球がじっくりくるといったかんじでしょうか。福岡の屋台は人々の憩いの場となり、観光資源でもあり、また独特の景観を創り出していました。

(早川 亜紀)

福岡は歩き回るのがにほよび規模の都市で、寒空の下、屋台の明かりを横目に見ながら調査を行いました。街並みや光環境に個性もありながら、整理された仕組みがきちんと統一感もつくり出しています。2月に新しく地下鉄が開通し、地下街も延長されたようなので、また新たな魅力が発見されることでしょう。



渡辺通り(天神)



天神地下街



屋台



中洲の屋台

# 第24回街歩き

## 東京夜景ヘリコプター調査

2004年12月8日

新木場駅からバスに乗ること約10分、「東京ヘリポート前」で下車して総勢14名の団員が集めたのは、今回お世話になった「朝日ヘリコプター」のビルでした。中に入って名前と住所を登録したあとに、さっそく乗車前のビデオを見せられます。地上700m上空を飛行するヘリコプターから見られる日中と夜の光景が次々と映し出されて、団員の期待は高まるばかり。ヘリからの夜景撮影ポイントなどを係員の方に次々と質問して乗車に備えました。

今回、飛行するのは「ナイト・ツアー銀座コース」という、東京ヘリポート～お台場～レインボーブリッジ～新橋～銀座～東京を巡る約8分のコース。遊覧飛行8分間で1人8000円という、短いけど贅沢な時間を過ごします。また、ヘリコプター1機には運転士の他に前方左の助手席部分に1名と、後ろに4名が乗られるようになっているので、グループを3つに分けて順番に飛ぶことになりました。グループごとに誰がどの機材（デジカメ・スチールカメラ・ビデオカメラ）を持って、誰が助手席に座って撮影するかなどを打合せ、PM7時過ぎにいざ第一陣の出陣です。

第一陣は田中団員がビデオカメラに三脚を付ける用意周到ぶりで、助手席のベスト・ポジションから夜景を撮影することに。他の4名の団員もみんなデジカメやビデオを手へヘリコプターに乗り込んで行くのを、第二陣、三陣の団員は2階の室内から見守ります。プロペラの回転速度が徐々に増して、まるで虫が飛んでいくような軽やかさでヒラッとヘリが飛び立つ様を見て、思わずみんな拍手をしていました。

さて、第二陣には筆者も乗り込み、前方助手席にスチールカメラを有する窪田団員を配していくことになります。「そろそろ戻ってくるので下で待っていて下さい」という係員さんの呼びかけに応え、バタバタとプロペラの回転音を響かせながら戻ってきた第一陣を迎えて交代でヘリに乗り込みました。シートベルトを装着し、耳にはヘッドホンをあてて準備完了。ヘリがふわりと飛び立ちます。

まず、東京湾を越えて目に入ってくるのがお台場の湾岸の景色。湾岸道路を走り抜けるおびたしい車のテールランプの光や、暗闇の中に柔らかな曲線を描きながら橋脚が白く浮かび上がるレインボーブリッジが目につきます。そして、ヘリはあっという間に都内上空に達して、目の前には汐留再開発地区のビル群や東京タワー、そしてその奥にライトアップされた六本木の森タワーを臨むことができます。オフィスビルから洩れる白い光と幹線道路のオレンジ色の光、航空障害灯の赤い点々が、普段は見上げる都心のスカイラインを構成している様がよく分かりました。また、右手奥には皇居周辺の森がそこだけ暗闇に沈んでいるのが見て取れました。

その後、ヘリは大きく右に旋回して銀座・東京駅方面へ。この辺は、先ほどまでの建築1つ1つが目立つ景色とは異なり、逆に通りの白い光やネオン看板の数々が、銀座という街をかなり明るく照らし出している様が簡単に見て取れます。白く明るく、何本もの川のように平行に走る銀座通りの夜景はとても印象的でした。そうこうして次々と目の前に繰り広げられる東京

師走の暖かい晴れた夜。いつもは“街歩く”照明探偵団が、今回は東京の夜景を“空”から調査するため、ヘリコプターに乗り込みました。わずか8分間の短い遊覧飛行でしたが、その景色たるや格別なこと。地上からはなかなか見ることができない東京ナイトスケープを堪能しました。

の夜景に目を奪われるうちに、ヘリはあっという間に8分間の飛行を終え、ヘリポートへと戻っていったのでした。

続いて第3陣は面出団長を筆頭に4名がヘリコプターに乗り込み、各団員とも大都会東京の夜景を満喫しました。そして、一行は月島に場所を移して、もんじゃとお好み焼きを肴に世界の夜景話に花を咲かせました。

(井元 純子)



月島でもんじゃ焼きをほお張る団員一行



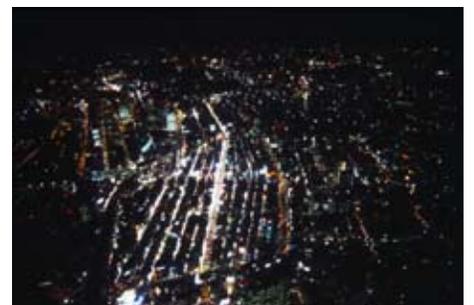
銀座コース飛行ルートマップ



地上700mから見る東京都心の夜景



第2陣飛び立つヘリに期待が膨らむ



汐留再開発地区を手前に銀座を臨む

# 第27回 研究会サロン 2004年12月15日

街歩き、ギリシャ調査報告、名古屋・大阪都市照明調査報告、など

## ■東京夜景ヘリコプター調査報告

今回の街歩き「ヘリコプター調査」という企画は、田中謙太郎団員が「年末のクリスマスシーズンだ」といつい木に取り付けられたイルミネーションに目を奪われがち。でもこの時期晴れていれば、年間を通じて最も大気が澄んでいて遠くまで景色がくっきりと見える。そこで地上のイルミネーションではなく、空中から東京という巨大イルミネーション（夜景）を見てみよう！」というやや軽いノリの発想でスタートした。

調査当日まで気にかかっていた天候も無事晴天となった。この企画、一人分のお値段は9分で8000円！コースは木場から東京銀座周辺を一周。実際にはあつという間であるが、これは一度乗ってみる価値があると感じた。サロンではプロジェクターでこの飛行シーンをお見せしたわけだが、なかなか臨場感が湧かない。しかし後で冷静に撮影した映像を見ていると東京の明るさのバラつき＝商業エリアのバラつきとなっていることが良く分かる。サロン参加者も

今回のサロンではギリシャ、名古屋、大阪の都市照明調査に加え、地上からではなく空中から東京夜景をヘリコプターで調査した「街歩き」についての報告が行われた。

普段自分たちが仕事や遊びで行動している範囲の景色を思い浮かべながら、この夜景に重ね合わせていたようだ。詳細については街歩き報告の方に掲載されているのでご確認を。

## ■都市照明調査（ギリシャ・大阪・名古屋）報告

今回の海外調査報告はギリシャ・サントリーニ島と首都アテネ。青と白の美しい町並みに自然光が調和した絵はがきのようなサントリーニ島と、オリンピック後の興奮さめやめアテネを訪れた田沼団員が報告した。照明探偵団はこれまで数多くの海外調査を行って来ているが、最近ではもう一度日本国内の都市を詳しく調査しよう！という目標も掲げている。今回は岡本団員が名古屋、平岩団員が大阪にとび、変わりつつある都市の調査を行った。もともと東京～名古屋～大阪～福岡というラインは日本では商業、工業の要であり、新幹線が開通し、高速道路が引かれて栄えてきた。それぞれの都市が多くの企業や人口を抱えながら、その都市の特色を感じさせるような景色がある。そこに共通しているのは各都市を貫くメインストリートを中心として多くの施設（公共施設、交通施設、商業施設、コミュニティ施設など）が点在し賑わいを感じさせている点だ。それは決して時間とともに勝手に変化してきたものではなく、その都市に暮らす人々のニーズや工夫が人の動きや興味をコントロールし、都市の形成につながっているのと思う。

今回の国内2都市の調査は、そんな都市軸を中心に人の動きや周辺施設や光環境を調査した。中には東京にはない感覚や常識が多く見られ、非常に興味深く感じられるものもあった。皆さんも是非慣れた都市でもよ～く見てみて下さい。見慣れていると思っているものの中にも不思議な景色が隠れていますよ。

(田中 謙太郎)



# TOKYO NIGHTSCAPE 2050 ~ 21世紀の東京夜景~ 開催

松屋銀座 7階・デザインギャラリー 1953

2004.10.13 ~ 11.8

## ■2050年の東京夜景

2050年の東京の夜は暗くなっているのか、はたまた明るく輝きを放っているのか。様々な推測が言葉・模型・映像を駆使して表現された展示会が、面出団長監修のもと行われました。

実は今回の展示会は、1998年に東京・五反田のデザインセンターで行われた『2050年 TOKYO 夜景展』の内容を新たな切り口で表現したもの。前回の展示会で建築家、デザイナー、評論家、写真家など分野を越えて参加した119人のプロフェッショナルたち＝予言者の方々に作成頂いた色紙やインタビューした素材を元に再編集して行われました。

武蔵野美術大学・面出ゼミの学生の手によって作られたのが、2050年の人々の生活を示す3種類の模型。照明器具は無く発光面が点在する住宅、街路灯の無い街、いくつもの層となって輝く街、など多少の願望と飛躍した想像を含みつつも実現の可能性が随所に見られる都市像が描かれました。

## ■光はどこへ向かうのか

壁面いっぱいには並んだ予言者の方々の言葉を拾っていくと、おぼろげながらも2050年の東京夜景が見えてきます。「光る個体が闊歩するのだ。」という作家・島田雅彦氏の言葉からは、暗闇の中をボーッと発光する人が歩いている様子が想像できます。「空間を照らす照明から、局所的、個人的な光に変化する。粒子化した光が森の中に点在する風景。」とは建築家・隈研吾氏の言葉。やはりこちらも均一な明るさとは対極にある景色です。

全てが暗闇に覆われてしまう訳では無いけれども、決して均一に明るさが分布している、という景色ではない。必要とされる明るさが都市に点在して、ところによってはとても強く発光している。その光が規則的に制御されつつも、人間の根本が求める灯火のようなあかりのあり方もどこかで求められ続けている。そんな景色を私は想像しています。さて2050年、あなたはどんな光があつて欲しいですか？

(田沼 彩子)



5つの層が重なる『街 CITY』の模型



言葉・模型・映像を駆使した会場風景

# 100万人のキャンドルナイト @ 原宿キャットストリート開催

原宿キャットストリート / 生活の木・原宿表参道店

2004.12.21

## ■キャンドル・パフォーマンスを楽しむ

“2時間でんきを消してスローな夜を”をテーマに、旧渋谷川遊歩道(通称・キャットストリート)沿道で私たちがキャンドルナイトをはじめて今回が3回目。夏至と冬至という1年で一番日が長い/短い日に地球の時間の流れを感じる・・・というのもこのイベントのひとつの目的です。できることなら背景に完璧な闇をつくるために沿道に建ち並ぶまぶしい街路灯を消す、というところまで徹底したいのですが、区道の公共照明ということでやはり消灯はNG。周辺の店舗に協力頂いて、できる限り消灯してもらうことに留まりました。学生を中心とした11のキャンドル・パフォーマンスもただローソクを灯す、というだけでなくパフォーマンス自体を楽しんだり、メッセージを込めたり、といったチームが増えました。キャンドルのピアジョッキで乾杯する、一円玉をつないだチェーンのインスタレーションで電気代を表現する、などなど。



キャンドルのピアジョッキで乾杯

## ■クリエイターによるキャンドル・デザイン展

今回は初めての試みとして行われたのが「クリエイターによるキャンドル・デザイン展」。これは10名のクリエイターの方々にこの日のためにデザインして頂いたキャンドルを展示したものの。深澤直人氏、佐藤卓氏など錚々たるメンバーが多忙な中この展示会に参加してくれました。プロのクリエイターとは言え、キャンドルのデザインは初めて、という人ばかり。ただ形ができればいいのでは無く、きちんと燃えなくてはいけない、というのがローソクの難しいところ



キャンドル・デザイン展でクリエイターの作品に火を灯す

です。そこはローソクメーカーであるカメヤマローソクのご協力もあって、短期間の中で進めた計画だったにも関わらず、完成度の高い作品に仕上がりました。中には鈴木康広氏のように自分でパラフィンを溶かしていくつもの試作品をつくり、試行錯誤を重ねた、という方も。面出団長は「浸蝕するパラフィンの湖」と題して時間の経過と共にローソクが溶けていく様を表現しました。点灯する瞬間は誰もがそれまでの苦労も吹き飛ばす嬉しそう顔になっていました。

(田沼 彩子)

## 2000km 欧州ドライブ旅行

照明探偵団のHPが格好良く刷新されたというのに、この私の探偵ノートは依然として2004年の春にノンビリとホワイトアスパラガスなどをパリで食べている景色を伝えているという体たらく。これはたいへん申し訳ないことです。深く反省して、これからは欲張らず最低毎月一度は更新することにいたします。あまり長く書かなければよいのです。皆さんよろしくお付き合いください。

さて今回、探偵団事務局からは「昨年の初秋にドイツやチェコを回ったときのことを書いて…」というリクエストをいただきました。もう何ヶ月も前のことになるので、いやだなあと思っていたのですが、私がデジカメで撮影したスナップ写真をバラバラとPC上で送りながら回想しているうちに徐々に気持ちが入ってきて、「うん、この事件も探偵ノートに報告しておこうか」という気分になりました。私にとっては「欧州2000kmのドライブ旅行」は久しぶりのちょっとした事件でしたので…。

そもそも私の勤める武蔵美のゼミ学生を誘って(学生に誘われて?)短い期間に軽々しくレンタカー旅行しようとしたのが甘かったのかもしれない。2004年8月27日にFrankfurtで全員集合した13人(11人の学生と一組の夫婦)は大判のヨーロッパ地図を堂々と広げながら「南下してまずハイデルベルグにちょっと立ち寄って、それから一気にプラハに向かいそこで一泊。プラハに2泊してからドレスデンに立ち寄って一路ベルリンに入りそこで2泊。そして最終目的地のハンブルグで世界照明探偵団のイベントに参加して3泊し、早朝に出てフランクフルトの飛行場に向かえば楽勝!」というプランを立てたのです。私は既に何度もヨーロッパのアウトバーンを運転して移動経験たっぷりなので、地図上での距離を計って、それを平均時速150km/hあたりで割り算すればよし…と思っていたのが誤算でした。勇敢なわがゼミ学生はもとより海外での運転経験はなく、日本と反対車線を走るだけで緊張する上に、レンタカー代を安くする為にはオートマチック車を諦めてマニュアル車にしたものだから、運転に慣れるだけでたいへんな思いをしたそう。中にはつい先月運転免許をとりました〜、という威勢のいいドライバーも混じっていたのです。街のあたりを調査しに行ったのか、運転度胸と技術を付けに入ったのかかわからないような人もいたとか…。まあ、これも貴重な経験をさせてもらった、ということで無事故無違反(細かい違反はたくさんあったのだけれど警察沙汰にはならなかったという意味で…)で帰ってきたのが奇跡的と思えるほど、私たちは強運を喜び合いました。

まず、3台のレンタカーになってしまったことがまずかったです。もちろん私が1台で走るのであればルンルンです。2台となると、ちょっと後ろを気に掛けてあげて…という感じ。しかし3台になると全く違って大所帯のキャラバン移動のようなのです。それもなぜかチェコに入るためには車種の規制があるらしく、皆同じような濃紺色のワゴンタイプで見分けがつかない。屋間からヘッドライトをミラーアップして点灯することで精一杯仲間を主張して走っていたのですが、120~130km/hのノロノロ運転でさえ、高速道路で見失ってしまうこともしばしば。市街

地を走る時などは信号に引っかかるばかりでなく、慌てて他の車に引っかかりそうになったり、横断歩道の人を脅かしたり…、とまあ3台連なって走るということがこんなに疲れることだとは知りませんでした。オマケに学生の車は交代するドライバーがいるのですが、私の車は私だけ。助手席で地図両手にナビゲーションに励む女房殿も疲れて頭痛と吐き気がしてきたとか。これからは海外で連れ立ったドライブはもういたしません。ドライブを楽しむ暇もありませんでした。

ドライブがたいへんだったということだけでずいぶん話が弾みましたが、学生たちにも聞いてみたいところです。ドライブは疲れただけの経験なのかどうか。希望的には何か輝くものを持ち帰ったと応えて欲しいところです。

フランクフルトでは私の常習のザクセンハウゼンでアップルワイン片手にでかい豚肉に食らいついて騒いだ後に、学生たちは食欲に夜のメイン川あたりの夜景を調査撮影しようです。私は酔った後には仕事をしないことにしているので、学生たちを置いて早めにホテルに戻りましたが…。さすが面出ゼミの学生は体力勝負 根性があります。その後のプラハなどでは、四方八方に散りながらブルーモーメントの瞬間をいくつもの視点場から撮影しようと相互にぶつからんばかりに走りながら移動しています。見上げたものでした。私も負けじと急速学習したニコンのデジカメ撮影に熱中したのですが、あまり熱すぎたあげくに、まんまとプロのスリ集団に財布だけきれいに抜き取られる惨事に会いました。見事な手口に完敗でした。しかし私もこのようなことは日常茶飯事、慣れたもの。直ぐに秘書に連絡し、全てのクレジットカードやキャッシュカードを封印し、多少の現金を諦め、暗い顔をしている女房殿を慰めて、けろっと30分前に起きた小さな事件を忘れたのでした。これは本当に私の誇れる才能です。人生、忘れることが大切なのです。

プラハの薄暮は本当に美しかった。実は30年も前、学生時分に一人旅でプラハに来ているのですが、久しぶりにいい光に包まれました。川のある風景の距離感がいいのでしょう、照明技術的には色々不満もあるのですが、街があかりを吸い込んでいる感じがするのです。青い空の残照を街が喜んでるように見える。そして夜を迎える暖かい色の街あかりが歴史を超えて人の暮らしを伝えているのです。東京に暮らしているからこそプラハの夕暮れをないものねだりしているのかも知れませんが…。



3台のレンタカーに便乗した仲間

ドレスデンではわずかに昼飯を食べ、美術館を走り回っただけでした。できるだけ遅くならないうちにベルリンに着こうと心に誓ったからです。ベルリンでは学生たちも「あそこに行こう、ここを回ろう…」などと、それぞれのイメージを持っていたようですが、皆が共通して行きたかったところはユダヤ博物館です。ダニエル・リベスキンドの代表作だけあって見事な建築設計の技を見た思いでした。以前に来た時にはどういう訳か(多分休館日だったのでしょう)中へは入れずに外をぐるぐる回っただけでしたから、内部空間でも、とりわけ天空光の少しだけ入る閉鎖的なコンクリートの空間には感じるどころがたくさんありました。天井の僅かな個所からだけ、外部の様子を想像するための光が入射する。鳥のさえずりも木々の揺れ動く音も聞こえない…。ただわずかな光だけ。死を待つものにはあまりに凄惨すぎる時間です。深く考え込まずにいられます、この光は幸せを見せたのか、不幸を冗長させたのかと。

おやおや、あれやこれやと横道に入っていたら、もう与えられた字数になってしまいました。ベルリンでは久しぶりに学生と離れてGrand Hyattに泊まり、ゆったりとプールとサウナ三昧をしたので旅の疲れが癒えたことや、その後のHamburgでの世界照明探偵団フォーラムでの私のプレゼンテーションを学生に誉められたことなど、語りたこと山ほどですが、また次回と言うことにします。次回からは毎月1回、1200程度の探偵ノートにしたいと思います。どうなることやら…。

050118 JL-719にて  
面出 薫



ベルリン・ソニーセンターで感激する探偵団



プラハの夕暮れブルーモーメント

## 面出団長

### 囲炉裏のあかりを語る。

『～日本の家 再発見スペシャル～ 家という物語』（読売テレビ系列、2月20日（日）15:00-16:30）に面出団長が出演しました。番組のテーマは「日本の伝統的な家屋の良さを見直そう」、というもの。日本家屋ならではのぬくもりのひとつとして囲炉裏が取り上げられ、なぜ囲炉裏端は落ち着くのか、安らげるのか、など面出団長が語りました。撮影は川崎市立日本民家園の囲炉裏端で実際に火をおこして行われ、煙に燻されながらも久しぶりに暖かな燃える火を間近に感じました。



お母さん達と囲炉裏を囲む



撮影が行われた民家

## ★★投稿募集中★★

照明探偵団通信 vol.22（次号）の原稿を募集しています。独自の照明探偵レポート、光に思う今日の日本、照明について知りたいこと、疑問に思っていることなどなど、テーマは何でも結構です。日頃ひかり、あかりなどについて思っていることや様々なレポートを照明探偵団通信に発表してみませんか。原稿は、e-mail で送付して下さい。メール上記述でも原稿テキストファイル添付でもOKです。投稿お待ちしております！

照明探偵団・事務局

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-28-10

ライティングプランナーズ アソシエーツ内

TEL : 03-5469-1022 FAX : 03-5469-1023

e-mail: office@shomei-tanteidan.org <http://www.shomei-tanteidan.org>

## 照明探偵団日記

茶道に「夜咄（よばなし）の茶事」というのがあるのを知っていますか？冬季に日没から夜間にかけて行われる灯火を使った茶事で、とても風情があるもの。茶室自体もともと明るく設計されてはいませんが、暗闇の中に炭を熾す火鉢や行灯が置かれ、手元が手燭で照らされた様子は暖かく、美しい。茶器はもちろん、床の間の掛け物なども点々と配置された灯火で低い位置からほんのり照らされると、白々とした蛍光灯の下では見えなかった白や黒が断然浮き立ってくるから不思議です。谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」はこんな情景のことを言っているのかも、ということが実感できます。なかなか茶室に行けて茶事を体験できる機会は少ないと思いますが、たまには家で全部電気を消してローソクを灯し、静かな気持ちで一服お茶を飲んでみてはいかがでしょうか。

（田沼 彩子）

【照明探偵団の活動は以下の22社にご協賛いただいております。】

ルートロンアスカ株式会社 岩崎電気株式会社 株式会社菱晃 カラーキネティクス・ジャパン株式会社 松下電工株式会社 株式会社ウシオスペース  
ヤマギワ株式会社 山田照明株式会社 マックスレイ株式会社 ニッポ電機株式会社 株式会社エルコ・トートー 株式会社ウシオライティング  
日本フィリップス株式会社 トキ・コーポレーション株式会社 東芝ライテック株式会社 大光電機株式会社 金門電気株式会社  
小泉産業株式会社 マーチンプロフェッショナルジャパン株式会社 湘南工作販売株式会社 小糸工業株式会社 株式会社遠藤照明